

ONE LOVE 通信 70号

2021年4月25日発行

怒涛の2020年が終わり、気が付けば春。ワンラブ始まって以来かつてない問題を目の前に、自分たちがこれから何をしなくてはいけないのか、何をしたいのかを考えた時間は過ぎ、新しい夜明けを迎えています。再建に向けて、たくさんの方が力を貸してくれました。このご時世に。活動を始めてから今まで、私たちはずっと支援者に恵まれてきたなあ。

今回はそんな皆さんに支えられてきた成果のご報告。悲しみから立ち上がって、また前を向くことができました。これからもワンラブ・ファミリーの一員として様子を見守っていただきたいね。やっぱりワンラブは不滅なのだよ。



【完成に向けてまっしぐら！】

皆さま、一昨年暮れから去年にかけていろいろご心配をかけてしまい申し訳ございませんでした。精神的に完全には立ち直れておりませんが、支えてくれる人たちの思いを胸に、とにかく環境を整え、新たな一歩を踏み出したいと思います。

現状報告。ワンラブランドを壊されてから、自分たちの住まいも失ったので、建築現場から近い一軒家を借りていたけど、そこから出ることができました。資金を節約したくて、払う家賃がもったいないので、まず建築現場の一角を住める状態にし、そこに引っ越しました。去年の暮れのことです。遠方から来る障害者や訪問者が泊る部屋を作る予定だったのです。そして歩行練習や会議ができるスペースも整え、それらが今は私たちの仮の住まいとなっています。何しろこっちで生活を始めてから25年以上経っているので、自分たちの荷物も結構あります。そんなものも運び込み、生活をしながら、私のオフィスもその中に構えました。

ひとつ問題があるとなると、この場所は寒い。建物は3階建て。建築にあたりこの地域は新しく建物を建てる時、道路のレベルから2階建て以上にしなくてはならない。土地は道路より下に位置するので、結論として3階建ての構造にしなくてはならないのです。引っ越したスペースは一番の階で、太陽の動きを考えると非常に日が差しにくい向きなのだ。この一番下が義肢製作並びにその他活動の場所になるわけですが、義肢製作所は問題なく日が差す。でも引っ越した空間はほとんど日が入らず、入ったとしても西日。そしてコンクリートの設計なので、底冷えするのです。だからいつもセーターを着ています。半袖だと震えます。今まではサンダル履きが多かったけど、足から冷えてくるので靴下を履くようになりました。そして窓は一方にしかなく、風が通り抜けず、湿気もあるのでした。そんなわけで買ったパンにすぐカビが生える…。その他の食材も気が付くとカビが生えていたりして、気づくとそのまま料理しちゃったりします。この場所で生活を続けるのは、どうやら健康にはあまり良さそうではないということが発覚しました。

BiBi真美のレワンダ・ブレンジ日記 第54回



建築現場の足場。木材を使っているが、役所より注意を受ける。ガテラは冷静に説明してまぬがれた。



建物は鉄筋コンクリート。たくさんの作業員が汗をかいている。

中にはさぼる人もいる。アシェールに現場監督を任せている。



2mの身長から監視役にはなれない。

2021年1月15日、ワグドラングで、ついに目標額の2倍がありました!!
みなさん、本当にありがとうございます!



facebookでライブ中継をしました。うれ涙…。

真美は義肢作りをやめて日本に帰ると思っていた人が多くいる…



これから何があるかわからないけど僕たちのために頑張ってください。応援しています。

新しい義肢製作所の完成は目の前。
皆さん、どうぞここからのワンラブに期待してください!!



…という場所で生活をしながら、建設を進めているという次第です。まあ、とにかく雨風はしのげるので、あまり贅沢は言いません。

そして前号でお伝えしていたクラウドファンディング。実に予定の倍にあたる1200万円が集まりました！コロナの影響で多くの人が仕事が減ったり、失っている中、これだけの金額が集まったこと、本当に皆さまありがとうございました。3カ月にわたる挑戦は、早い時点で予定の600万円を突破。その後もじわじわと支援が続き、最終日にはFacebookを通じて更なる支援の呼びかけと、一人で終了の時を迎えるのが寂しかったので、みんなと一緒にカウントダウンをしてもらいました。正直に話すと、クラウドファンディングをスタートした時、目標金額の設定に悩みました。実は1000万円集めたかったのです。でもその金額を設定して、もし集まらなかったら一銭ももらえない状態になってしまうので（目標金額に達しなければ、それまで集まった支援もゼロになる）それが怖く、600万円に設定しました。でも支援が増え続け、1000万円を超え、もしかしたら1200万円に到達するかもと思いながら、本当に最後の瞬間に1200万になった時、思わず泣いてしまいました。ありがたかったです。ワンラブのために、こんなにたくさんの人たちが応援してくれ、そして一緒になって盛り上げてくれました。

今まで私は人に支援をお願いするものの、その先一緒に奮闘してもらうことを避けていました。お金をもらって、その上手伝ってもらうなんて申し訳ない…という思いがあったのです。でも今回クラウドファンディングをして、たくさんの人がSNSを通じてシェア・拡散をし、支援が入った時、拡散してくれた人自ら「ありがとう」と伝えてくれることに驚きました。本来ならば私自身がお礼を伝えなくちゃいけない。それなのに私に代わって、いや、まるで一緒に戦っている同志のようにその言葉を伝えてくれるのです。嬉しかった。一人で奮闘しているわけじゃないって思った。

だからこれからはみんなのワンラブとしてがんばります。ルワンダで実行するのは私たちだけ、その行先をみんなで見ながら、この先続けていきたいなと思いました。

ガテラがよく言葉にする「ワンラブ・ファミリー」。それが目指すところかもしれません。ガテラは実はもうずっと前からみんなに一心同体になって支援してもらいたかったのです。

そして建築現場の様子。この原稿を書いている3月末の時点です。1階には義肢製作所兼ゲスト宿泊部屋と歩行訓練並びに会議のできるスペース。ここに引っ越してきたのは書いた通り。では肝心の義肢製作所の部分はどうかというと、結構いい線行っています。恐らくワンラブ通信がお手元に届いた頃には、ほぼすべて終わっているのではないかと予想されます。現在電気の配線・水道設備やトイレの設置は終了しています。あとは蛇口をつけたり、洗面台をつけたりの作業が残っています。そして建物の窓枠・ドアなどは鉄骨を買ってきて作っている途中。だからディスク

グラインダーで鉄を切る音が響いて、かなりうるさいです。さらに電気溶接をしているジリジリ言う音。電気溶接は結構電気を喰うので、今は電気代が飛んで行っています。それら窓枠などを建物にはめ込み、壁や窓枠すべてにペンキを塗りたいります。義肢製作所、一言でいうと最終の仕上げに取り掛かっているところとなります。

そんな状況の中、ポツポツと義足を作りにやってくる人もいるので、建築をしながらの製作です。今も一人患者さんが来ていて、じきに完成、品物を渡す予定です。



せっせとセメントと混ぜる砂をかき集める強靱な作業員。タフな彼らに誰も勝てない。

そして2階部分、ここには自分たちの最終引っ越し先となります。さらに小さなレストランもしくはカフェを作る予定で、部屋の間仕切りが終わったところです。細かいこと（床を整える、水道設備の設置、電気配線、壁ぬり、窓枠・ドアの設置）はまだこれから先のことになります。

また3階部分（シェアハウス予定）の柱をコンクリで作り、間仕切りをし、屋根を作り、細かいことを整えることになります。

それぞれかなり形になってきていると実感しています。大きい作業で残されているのは、最後の屋根作りと貯水タンク設置です。この地域、なぜか割と頻繁に断水が起こるようで、貯水タンクは必要。また停電対策も考えなくてはいけないので、発電機を設置する予定です。以前ワンラブブランドで使っていた発電機があるので、その容量を確認したのち、そのまま使おうと考えています。

まだ先のことはありますが、ソーラーも設置したい。アフリカは太陽がさんさんと降り注ぎます。だからその力を利用してお湯が出るようにしたいです。ソーラーは高いので、あるいは単にドラム缶を屋根に設置しておくだけでも、かなり水は温められ、電気代の節約になりそうです。

集まった資金でどこまで前に進めるのか、それは正直答えられません。建築を始めるにあたり、設計士に図面を描いてもらい、予算も出してもらったけど、設計を進めながらさらに案を変えたり、ワンラブブランドから拾い出した資材を使いまわしたりしているので、予算は予算であって、なかなか実際にいくらかかるかと計算できないのです。

でもできる限り節約をしながら…と言うことには変わりはありません。ワンラブブランドでブロックも作りました。ワンラブブランドを建設する時はレンガだったけど、今は時代も変わりました。あの頃は木々を切ることももうさくさくだったので、その薪でレンガを焼きました。でも今は木を切ることも禁止されており、レンガを焼くための手段がない。だから焼かずに済むブロックにしました。セメント代はかかるけれど、レンガより大きい分、実際に壁を作るた

めに積み上げる時間の短縮になります。但しワンラブランドから拾い出したレンガも使っているので、レンガとブロックのツートンになります。



セメントを流し込む作業中。
頭の上に10キロ近いセメントを乗せ、何度も何度も運び込む。

去年ワンラブランドを壊されてから、本当のたくさんの課題が一度に目の前に現れました。その一つに働いていたスタッフをどうするかということがありました。レストラン・ゲストハウスは運営などできる状態でなくなったので、申し訳ないけど退職してもらいました。庭の手入れや掃除をしてくれる人は一部を残し退職。セキュリティ、これはまだワンラブランドは宝の山状態なので必要。そして義肢製作所で働いているスタッフ、義肢装具士・事務・倉庫係など。結論から言うと、壊されて間もない頃はこれらすべてのスタッフは肉体労働に回ってもらいました。建物撤去作業やかれきの取り除き作業、あるいは泥だらけになってしまった物を洗う作業などを手伝ってもらいました。でも楽な作業ではなかったので、一人去り二人去り…という状態。そして私たちも多くの労働に賃金を払える状況ではなかったので、肉体労働をしている人の中でも、働きが良くない人には去ってもらいました。

ここで頭を悩ませたのが義肢製作所のスタッフ。申しわけないけれど、実は私は長年働いてくれていた受付のおば

ちゃんや倉庫管理のおばちゃんに不満を持っていました。仕事ができないというわけではないけれど、飲み込みが遅く、何度も同じミスをするので、毎日のように注意をしていたのだ。そして年齢のせいで能力がアナログすぎて、仕事のペースが非常に遅かったのです。今どきやはり事務員としてパソコンを使いこなせないというのは、給料を払って仕事をしてもらうには役不足ということになってしまうのです。だから心を鬼にしてクビを切りました。新たにスタートする時は、年齢も若く、パソコンを使い、更に外国語も使えるような人員を揃えたいと思っています。

そして義肢装具士たち。ワンラブランドがなくなったからと言って、障害者がいなくなるわけではありません。義足を必要としている人はいるので、すべての義肢装具士をクビにするわけにもいきません。そこでとった苦肉の策。一人は義肢装具士としてそのままスタンバイしてもらい、もう一人は建築現場の監督補佐に回ってもらうことにしました。なぜならば建築現場は常に多くの作業員がおり、働き具合を管理しなくてははいけません。人数が多いと適当にサボってどこか行っちゃって、夕方さも作業していたかのように戻ってきて日給を取りに来るのもあります。それじゃあ、こっちは困るのだ。だから建築の進み具合や作業員の管理をしてもらうために、義肢装具士1人を監督補佐にしたというわけなのです。白羽の矢が当たったアシエールは私は穏やかな一面しか知らないの、果たして監督というきびしい立場の仕事が務まるだろうかと思っていたが、なんのなんの。義肢製作所に通っていた時よりも早い時間（朝7時）には現場に到着し、みんなを指揮し始めるのでありました。意外にやらせてみるとできることがたくさんあり、新しい能力を発見できるのは面白くもあります。



ルワンダ事務所代表ガテラより

【差してきた光。】

マミがコソコソと何かを企んでいるので、何をしていると訊ねたら、クラウドファンディングをやるというではないか。以前義足を作るために一度やってみた時のことを思い出した。そんな資金集めの手段があると知らなかったの、俺にとっては良い勉強になった。

そして今回のクラウドファンディング。毎日帰宅するとマミから今日はいくら集まったと報告があり、驚きを隠せなかった。コロナでみんなも大変な時に、俺たちのために資金を提供してくれる。みんな、本当にありがとう。そのおかげで俺たちはまた立ち直れる。

俺は今時間のほとんどを建築に費やしている。朝目が覚めると、軽くスポーツをしてから現場を回る。作業する人たちは7時には来るので、それまでには段取りを考えておかなくてははいけない。段取りをまとめておかないと、その日一日が無駄になる。

そして一日が終わると、たまには作業をしている人たちにビールを奢り、仕事の様子を聞く。そういう状況で聞く話は本音が満載で、彼らのこと見えてくるからだ。

資材はワンラブランドから拾いだして再利用しているものも多く、そこかしこに昔の面影が建物に残っている。そりゃ新品を買って作った方が手っ取り早いのはわかっているが、拾って来たものを使う自分になんだか妙な優越感を持ったりしている。

去年の2月に建物を壊されて、マミも日本に行ってしまった、ルワンダで1人で闘わなければいけなかったけれど、実は俺は一人じゃなかったんだ。マミはマミで日本人たちにワンラブの状況を伝え、支援をしてくれる人を増やしてくれた。そして今回のクラウドファンディング。実に多くの人々が支えてくれた。この資金を元に、再建に向けて一直線だ。義肢製作所に至っては、もうあと一息だ。ここが完成したら、俺の気持ちも少しホッとする。もちろん建物すべてを完成させるまでは落ち着くことはできないけど、もう俺たちの立っている場所はゼロ地点ではない。

去年は日本に行けなかったの、今年は行きたい。早くコロナの状況よ、落ち着け。日本に行ったら、いろいろな所を回り、支援してくれた人たちにお礼を伝えたい。そして願わくば一仕事終え、家に戻った時に、湯船にお湯をたっぷり張って、のんびりとお風呂に入りたい。

みんな、前号で約束した通り、良い知らせができただろう？俺は言ったことは必ずやるのだ。

とまあ、このような状況で、すべてが完成するにはまだ時間が多少かかりそうではあるけれど、とにかく義肢製作所再建の目処は立ちました。本当にありがたいことです。恐らくこれから大変なのは、未だ政府が提供した倉庫にたくさんの荷物が置きっぱなしになっているので、それらをここに持って来ること。そしてそれをどこに置いておくか。泥にまみれて使えなくなった物も多いので、仕分けもしなくちゃいけない。それらの仕事はきっとほとんどが私の仕事となります。それを考えると頭が痛いけど、どうやら私は過去にあまりこだわらない性格のようなので、面倒になったら一気にえいやと捨ててしまおうと密かに思っているのです。過去は過去。未来は未来として新しく作っていこう。

どうぞ皆さま、この先もワンラブの行方を一緒に見守っててください。建築を進める上でまだ資金が足りない部分もあるので、引き続きご支援お願いします。そして見晴らしが良い所なので、出来上がった暁にはルワンダに来て、夕日を眺めながらビールでも一杯飲もうじゃありませんか。

【パラリンピックの行方。】

一体全体オリンピック・パラリンピックは開催されるのだろうか（21年3月末現在）。とりあえず先日オリンピックの聖火リレーが始まったけど、日本のみならず、世界で盛り上がりを見せる気配はない。

個人的には今このタイミングで開催するのはいかながなものかと思う。やるやらないの話し合いが、肝心の選手の意見を取り入れずに内部で行われているからだ。選手は記録を出すことに専念すればいいってものじゃない。選手のやる気が高まってこなければ、記録だって出せない。それにこの状況で海外から選手が来たいと思っているのだろうか？例えば入国時にPCR検査をして、しかるべき隔離期間を持ち、大会に臨むと仮定しても、隔離期間のホテル費用（あるいは選手村の一部を待機ホテルとして使うとか）など自己負担になるのだろうか？そうすると先進国はまだしも、予算の少ない途上国では予算を捻出することができず、どんなに出たいと思っても金銭的理由で参加できない。

そしてコロナはまだまだわからないことだらけなので、どれだけ万全の準備をしたところで、大会中どここの誰も感染しないとは限らない。あらゆる検問をすり抜けるコロナだってあるかもしれない。そうなったら誰が責任を負うのだろう。自己責任になってしまうのであれば、あまりにも悲しい。しかも選手村で感染が見つかったと、滞在者は阿鼻叫喚の大騒ぎになり、下手すると自国にも帰れないという状況が発生する可能性だってある。

だから一つ一つそれらの問題の対応策がはっきりしていないのであれば、やはりここはやるべきではないと思うのです。そのために練習を重ねてきた選手や関係者には申し訳ないと思うけれど、出てきた状況を冷静に受け止めることも必要だと思うのだ。

先日64年に行われた東京オリンピックの映像を見た。私はその時まだ1歳だったので、記憶にはない。でもその

映像から伝わる高揚感。一人一人がその祭典に「参加している」という雰囲気。オリンピックは競技を競い合うことが目的なのかもしれないけど、この高揚感を味わうということももう一つの目的なのではないだろうか。

オリンピックではないけれど、70年に行われた万国博覧会も同じような効果があったと思う。私は小学生で夏休みに両親に連れられて行った。妙に暑くて寝苦しい旅館に泊まり、会場に着いて、恐らく生まれて初めて目にした異国の人たち。先を争うかのようにパビリオンに駆け寄る人。長蛇の列に太刀打ちできず、恐らく1つか2つか中に入ってから展示を見なかったように思うけど、あれもみんなが参加したいと思わせるイベントだったのではないだろうか。

追求してみると、その類のイベントに人々が求めるものは「夢」なのではないかと感じるのだ。例えばオリンピックの場合、自分は速く走ることはできない。でもあの選手は風のように走り抜けてくれるんじゃないかっていう。

でも残念ながら、今度のオリパラにはその夢が感じられない。利権を求める人たちが牛耳って、回りを動かしているように感じてしまうのは私だけなのかな。



あの栄光を再び！
2000年シドニーパラリンピックにルワンダ初参加。
たった一人のパラリンピアン。

世の中はいろんなことを原点に戻した方が良いと思うのだ。お金を使い、技術を駆使して、人ができないような演出をして度肝を抜かせるより、純粋に競技をしている人の姿を見られるような、そんな大会。そういうおとなしいオリパラを見たいな。

ワンラブブランドを失って、私たちもたくさんのものを失った。何をすべきなのか、何を求めているのかを考えなければいけなくなった。もうやめた方が良いのではないかも思った。だけど今やめても他にやれることはない。だったらやらなくちゃいけない。そして結局行きついたところは、大風呂敷を広げるのではなく、淡々と義足を作っていくということだった。

パラリンピック、やるやらないにかかわらず、ガテラは参加することができない。記録もないし、どこかの大会に出た事実すらない。シドニーパラリンピックでルワンダを初参加に導いた私たちとしては、故郷で行われる東京パラリンピックにぜひ参加してほしいと思っていた。でももうその夢は叶わない。悲しくはあるけど、それで良いのかもしれない。ルワンダの障害者に自分たちの能力に気づいてほしいと思って始めたパラスポーツ。たまたまシドニーに行ったという華やかな舞台があったけれど、あれは誰かがくれた大きなプレゼントだったと思う。

だから東京パラが行われようが、中止になろうが、私たちはこれからもみんなで騒ぎながらやっていこうと思う。自分たちの能力に気づけるように、また原点に戻って。



今号の患者さん

今月は誰、というわけではありません。去年から今年にかけて来てくれた患者さんもうもろです。

ワンラブランドを壊されてから、基本的には義肢製作は一時停止状態ですが、とりあえず来所した人には対応しようとする場所だけは確保してきました。でも材料や道具をすべて運び込んでいるわけではなく、また立ち退かされた時に慌ててそれらをまとめたので、正直な所どこに何があるのかわからず、患者さんが来てもすぐに対応できる状態ではありません。

そして多くの人は、強制撤去をされてから、ワンラブは既に活動を閉めたと思っているようです。私たちも自分たちの準備が整っていないので、公に「やってますよ～」とは言えず、知る人ぞ知るという形で細々と義足を作ってきました。

ワンラブの活動をスタートした時、国内で義足を作っているところは自分たちを含めて4か所のみ。政府や軍の病院、ガテラが育った障害者施設だけでした。その後ワンラブで学んだ技術者が独立したり、またプライベートで小さな工房で靴の修理や義足製作をする人も出てきました。みんなそれぞれ運営には苦労しているようです。現在支援として義足を作っているところは、私たちだけとなっています。他は政府からの資金援助があったり、国際組織から支援をもらいながら有償で作ったりしています。収入のある障害者は少ないので、自費で義足を買うのは難しく、それ故ワンラブの再開を待っている人も多いです。

どこから「ワンラブはまだ義足を作っているらしい」という噂を聞いた人は、恐る恐る連絡をしてきて、確認を取ります。「本当にやっているの？」



トラックに荷物を積んで、新しい所へ引っ越し！
これからどんな未来が待っているのかワクワク。

まだ整っていない義肢製作所を訪れる彼らは皆口々に言います。「あんなことがあったから、もう義足を作るのをやめて、日本に行っちゃったかと思ったよ。」

これは来所する障害者に限らず、多くの人が言います。精魂込めてやったことを無残にも壊されたから、もういい加減見切りをつけてさっさと楽な場所に行ってしまっただろうと思うのですね。

その気持ち、すご〜くよくわかります。自分たちもなんでこんなに意固地にルワンダで義足作ろうとしているのか、わからなくなります。だからそんなふうに患者さんから言われると、一緒に笑って、そうだよなあ…と話します。

でも結局彼らの口から出てくる言葉に後押しされているんだろうと思うのです。

「あの時は本当にひどい目に遭ったね。僕もそれを知った時に、なんでルワンダの障害者のためにやってきたのにあんなことをされるのか、理解に苦しんだ。だけどこうしてまた義足を作ってくれること、それは僕らにとってはありがたいことだ。これから何が来るかわからないけど、僕たちのためにがんばってほしい。応援しているから。」そんなふうに言われたら、やめたくてもやめられないのです。

義足を作りに来る患者さんは実にわがままです。必死に作っても、あれが嫌だ、ここをこうしてくれと注文がうるさいです。こっちはお釈迦様でも何でもないので、ついそういううるさい注文に腹を立ててしまいます。もうこの辺で妥協してくれ〜という感じです。

いろんな思いが頭の中を交錯します。無償で渡しているんだから、こっちだってできることには限りがあるのよ。それを理解してくれという思い。そしてどうせ作るならとことん気張って出来上がりを追求しようという思う。

思うにこれまでルワンダで義足作りを続けられた理由の一つに、彼らのわがままがあったような気がします。だからそのわがまを満足させてやろうじゃないかという意地。もっとも限界はあるけれど…。これが妙に彼らがベコベコして恵んでくださいというような姿勢だったら、恐らく続かなかったように思うのです。それは対等の関係を築いているとは言い難いから。

ルワンダは障害者のための設備はまだ不十分で、建物に入る時の段差は当たり前。信号機が目が見えない人に対して音を出したりすることはありません。それでも虐殺直後よりは整ってきて、例えばテレビのニュース番組では多くの場合手話付きだったり、ちょっと急勾配で自力で車いすで上るにはかなり大変だけどスロープが設置されたり、がんばっていると思います。

わがままな障害者は、実は決してわがままなわけではなく、恐らく人として当然の権利を口にしていて、回りはそれに答えていく必要があると気づかせてくれます。

この先去年以上の試練は出てきてほしくはないものの、彼らのわがままによって鍛えられ、更には不条理な政府の対応にも鍛えられ、ワンラブはますます強くなっていくことと信じています。

義肢製作所の完成は目の前。荷物の整理はボチボチやろう。そして義足を求めて訪れる障害者と一緒にいろんな愚痴を言いながら、この先もやっていこう。

今号で義肢製作所完成したぞ！と伝えられそうで、まだ伝えられないのは悔しいけど、次号までには絶対出来上がっています。

今まで通り、ガテラを筆頭に義肢装具士たち、そして追々見つける事務の人たち、更にはお掃除やセキュリティのみんなと一緒に、わがままな障害者の義足を作ることとしますね。

そして今日もまた新しい義足が1本出来上がりました。めでたし、めでたし。



雑文もろもろ

常に建築の音が聞こえてくる。今日は支えにしていた木を取り除くため金槌で木を叩くズンズンとした低音。そして時折入る釘を抜くギギギッという音。この音は夜になって作業が終わっても頭の中で鳴り響いている。

思えばワンラブをスタートさせてから、常に建築の音が聞こえて来ていた。ワンラブランドは広がったので、いつもどこかを修理しているような状態で、作業の音や建築作業員のおしゃべりが聞こえてきた。これは何だか落ち着かない反面、日常になっていて、たまに建築作業のない日なんかは静かすぎて物足りなくなったりする。この先、もうしばらくは頭の中で建築音がする状態が続きそうだ。そしてそれが終わった時、ホッとするのだろうか。

ルワンダに生活の拠点を变えてから25年近く経ち、その間プライバシーを持てたことはほとんどなかった。先に書いたようにいつも何かの作業の音がし、つまりいつも誰かが目の前を横切っており、落ち着くことがなかった。

もともと私は人と会ったりするのが面倒な性格で、日本にいても休みの日は出かけるよりも家でぼーっとしているのが好きだった。だからルワンダでぼーっとできない状態が辛くもあった。街に行けば常に誰かに見られ、私がどこで何を買ったかということまでチェックされた。ワンラブランドにいても誰かが掃除をしていたり、洗濯物を干していたりして、外に出て猫と戯れたくても思いっきり戯れることができなかった。

新しいワンラブが出来上がり、今までよりはスタッフの数も減り、いつもどこかでやらなくてはならなかった修理作業も恐らくなり、もしかしたら休日は誰の目を気にすることなく、のんびりと外で本を読んだりできるようになるのかもしれない。

正直今はそれを求めている。誰にも邪魔されない一人だけの時間。そして思いっきり猫とじゃれ合う時間。そして一通りその時間を楽しんだ後は、またガヤガヤとうるさい日々が恋しくなるのかもしれない。

まあきっとその時になってみないとわからないだろう。皆さん、どうぞこれからのワンラブにも期待しててください。私も出来上がりを楽しみにしています。

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆さまのご意見等を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、ボランティアも常時募集しております。またルワンダで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

書き損じハガキ、未使用切手は下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。

ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いています。

必要の場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-28-304 TEL: 080-6564-4448

info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.rw(ルワンダ事務所)

郵便振替口座: 00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

【ご寄付をありがとうございました。】

いつもご協力ありがとうございます。途方に暮れていた去年ですが、たくさんの方々のお力を得て、再建に向けて進んでいます(20年11月~21年3月)。

11月	円
12月	円
1月	円
2月	円
3月	円

また上記以外にクラウドファンディングで集めた再建資金は12,315,000円となりました(ここからReadyForへの手数料が引かれます)。

義肢製作所未完成のため、訪れる障害者も少なく、今回は以下の通り義肢装具の製作となりました。

義足	6本
装具	0本
杖	24本
車いす	1台

【吉川英治文化賞をいただきました。】

この度「吉川英治文化賞」をいただきました。ありがたいことに、私たちの活動は過去さまざまな賞をいただいておりますが、今回の受賞のお知らせは全く予想もしなかったことなので、非常に驚いています。

吉川英治文化賞は、公益財団法人・吉川英治国民文化振興会が主催し、講談社が後援する文化賞。日本の文化活動に著しく貢献した人物・並びにグループに対して贈呈される賞です。

この賞のお知らせを受け取った時に感じたのは、以前シチズン時計株式会社からいただいたときと同じでした。両方とも突然メールで連絡が来たのです。青天の霹靂です。シチズンの時はメールの件名に「受賞のお知らせ」という感じで書かれており、正直に言うと怪しいだましのメールかもしれないと思いました。そして今回の賞についても、まったく予想はしていない状態で連絡をいただき、再び私は疑ってしまったのです。新種の詐欺ではないかと。

今思えば非常に失礼だったと思います。67年から続いている賞を、そんなふうに疑った目で見てしまったのですから…。どうもルワンダに来てから、人に騙されることや、うっかり返事をしてしまおうものなら、弱みに付け込まれるようなこともたくさんあったので、人を疑う性格がしっかり身についてしまったようです。

この賞は私の個人名でいただいたものですが、私たちが過去受け取った賞はすべて支援してくれた人たちの存在によって受けられたものだと思っています。

辛くてめげそうになっている時、常にみんながいてくれた。ガテラや私の亡くなった親父、いつも手伝ってくれるボランティアの皆さん、そしてワンラブ・ファミリーとなって資金や物資、その他いろんな形で支えてくれた人たち。本当にありがとうございました。あ、それから私の心を癒してくれた猫たちも。みんな集めて、パーティでもやりたい気分です。

【おことわり】

*発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、

すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

*当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはありません。

ワンラブ通信70号 2021年4月

発行: ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>

